

明治期不敬事件とミッション・スクール

佐藤八寿子（京都大学大学院D1）

I. 問題の所在

1. 目的

近代日本におけるキリスト教教育およびミッションスクールの問題は、しばしば「日本の天皇制」と「西洋のミッション」すなわち「日本 VS 西洋」という社会通念を前提として議論されてきた。このような二項対立的な概念図式に基づいた「キリスト教は日本の國体に適合しない」という認識、あるいはこれに対するキリスト教側の「迫害」「受難」の意識は、戦前戦後一般のものであり、学術分野においても、先行研究の多くはこの図式を所与のものとしている。

本発表では、この解釈枠組みによって看過されてきたミッションの社会的機能について考察するため、主として明治 2、30 年代に発生したキリスト教関係の不敬事件に焦点をあて、その実態を再検討し、さらに上の概念構成を脱構築することを目的とする。

2. 対象と方法

小股憲明（1998）によれば、キリスト教関連の不敬事件は、日清戦争前までの期間に突出して発生し、その後 30 年代にかけてはやや落ち着きごく低い横這い状態に入る。これら明治 2、30 年代のミッション関係不敬事件の多くは、法律上の犯罪ではなく、広く世間で論議を招いた社会的事件であった。本発表ではこれらの事件を「社会的に構成された“スキャンダルとしての不敬”」としてとらえる。

II. キリスト教関係不敬事件

1. スキャンダルの時代（時代背景）

明治 2、30 年代は、教育システムにおいても、またメディア環境としても、従来には無かった社会体制が整い機能し始めた時期にあっている。このような、言わば「知のインフラストラクチャー」の整備した新しい社会環境において、従来無かったタイプのスキャンダルが発生した。そうしたスキャンダルのひとつとして、ミッションの不敬スキャンダルは登場する。

2. 事実と言説との乖離（事例研究）

明治期キリスト教関係の不敬事件の実例とし

て、まず「ミッションスクールにおける事件」をとりあげる。

①明治学院、金沢女学校、同志社大学の祭日休業問題（明治 22 年） 明治学院が、秋季皇霊祭に、金沢女学校については、神嘗祭に、学校を休業しなかったことについて不敬が指摘された。この日の休業は当時義務づけられてはおらず、公的にもその校則が認可されていたにもかかわらず、社会的には「キリスト教の不敬」として攻撃がなされた。同志社の場合は虚報であった。

②北陸英和学校勅語奉読者の不敬事件（明治 26 年） 勅語の奉読者（伝道師）が正装していなかった為、不敬を指摘された。礼装ではなかったのは、本来奉読する予定だった者が登校せず、やむを得ず急遽代役として奉読したためであった。奉読者は不都合を認め謝罪し辞意を表し、翌日校長が礼服用のうえ奉読をやりなおした。事件としては、単なる過失によるもので、不敬行為と宗教とに何ら因果関係はなかった。

③金城女学校地久節不敬事件（明治 41 年） 地久節の儀式において、御真影奉拝・勅語奉読がされなかったことについて攻撃された。しかし、同校に御真影はなく、また地久節の趣旨からして皇后御製が相応しいとの判断で勅語奉読がされなかっただけであった。

つぎに「その他の学校におけるキリスト関係者の不敬事件」をとりあげる。

④第一高等中学校内村鑑三不敬事件（明治 24 年） 囑託教師内村鑑三が、勅語奉読式において低頭せず社会的に糾弾された事件。しかし、内村は必ずしも勅語への拝礼を「拒否」したわけではなく軽く頭を下げていた。彼は急進的愛国者でもあり、拝礼のやり直しにも同意したが、結果的には依願退職に追い込まれる。キリスト者の不敬というイメージを社会に植えつけることになった最初の重大事件である。

⑤熊本県八代南部高等小学校生徒の御真影不敬事件（明治25年）キリスト教信者が「わが宗敵である」と言って御真影を床にたたき落としたとされる事件。事実は、御真影近くに飛んできた一羽の雀を追い払おうとした生徒が御真影に接触したことが、針小棒大に伝えられた。

以上、「不敬」言説（報道、噂）と事件の真相の間には、明らかに隔たりが存在することがわかる。では、ミッションスクールにおける国民的儀式・儀礼は実際にはどのように行われていたのだろうか。残されている記録からいくつかの例を抜粋して挙げる。

⑥明道小学校勅語奉読式（明治24年）

⑦明治学院の天長節行事（明治23年）

⑧明治天皇結婚25周年記念日の記念ミサと祝典（明治27年）

⑨海星学校賞品授与式（明治27年）

これらの実例および籠谷次郎の研究（1996）などの示すところによれば、ミッション系の学校においてもその他の学校と「ほぼ同様に」国民的儀礼は実行されていた。

また、⑩山川均の『青年之福音』不敬事件に対するミッションの反応では、プロテスタント、カトリックの別なく一様にその行為を攻撃し、キリスト教会とは関わりない事件であると明言している。

3. 不敬の時代とミッション（事件の解説）

ミッションに対する社会的言説と実態との乖離は、いったいどの様に理解されるだろうか。

デマゴギー発生要因として、近代日本におけるミッションのアンビヴァレントな社会イメージが考えられる。キリスト教は旧社会においては国禁であり、明治期に入ってから依然邪教イメージは払拭されてはいなかった。また一方では、近代化を急ぐ日本にとって、欧化とキリスト教とは切り離しがたいものでもあり、殊に教育においてこの傾向は顕著であった。

こうして「忌避」と「羨望」の対象としてのキリスト教観が形成される。そのアンビヴァレンスは、その伝統的忌避よりむしろ、嫉妬へ転化しがちな羨望のゆえに激しい攻撃を誘発するものともなった。「不敬」スキャンダルは、その最も顕著な表徴のひとつととらえられる。

III. 日本におけるミッション

1. 真相・言説・社会的余波

ミッションに対する全ての攻撃は専ら、彼らが「日本の國体に不適合である」という前提に

たつてなされた。しかし、個々の事件を見る限り、攻撃された側が反国家を以て自らにんずる例はおろか、実際にそうした理由で発生したと推定できる事例すら見あたらず無かった。そのことは社会主義者による不敬事件（事例⑩や⑪など）と比較するとき明白である。確信犯的な不敬、反政府的な不敬行為は、社会主義者にはみられてもキリスト教関係者には見出せない。

不敬事件をめぐるスキャンダルの言説過程から、キリスト教をめぐる社会イメージが如何に生産され定着してきたかを看取することができる。事例⑤における「宗敵」と言って勅語をたたき落とす耶蘇教徒の像は、そうした社会イメージにくみこまれた幻想の最たるものであろう。ミッション以外の学校の事例をもとり上げたのは、それが社会イメージの形成に直接関与し、結果的にミッションスクールの現実を左右する力となったからである。あいつぐ不敬事件はミッションスクールのイメージを著しく失墜させ、例えば金城女学校においては生徒数が著しく失われる結果となった。

2. まとめ

ここで当初の対立図式を再検討してみよう。「キリスト教は西洋的でありしたがって反日本的である」という通念を示したが、その言説の生成過程を実例に即して読みなおしてみると、むしろ別の側面が露わになってくる。

すべての事例において、二項対立は実態ではなく、言説上に展開された表象にすぎなかった。不敬スキャンダルの核心は、信仰や天皇観そのものではなく、つねに「日本国民として行うべき儀礼」への参加態度の是非にあった。糾弾者も、また攻撃されたミッション関係者も、「不敬」という、日本国民にとっての禁忌そのものに対しては、間違いなく社会的に承認し肯定をしていた。つまり「不敬」コードが紡ぐ社会規範が制度化し定着していく過程において、攻撃者と被攻撃者双方は、共犯の関係にあったと言える。

つまり、不敬スキャンダルとは「日本 VS 西洋」の対立などではなく、社会合意に対する参加の意思表示の有無による「統合／排除」の力学がひきおこした葛藤、すなわち新しい規範の制度化という位相における軋轢であったと考えられる。スキャンダルをとおして規範はたちあがり、社会的制度化により再生産された。

それは、「不敬」という新しい文化コードによって規定される場所の「日本国民」というひとつの合意／ルールの出現でもあった。